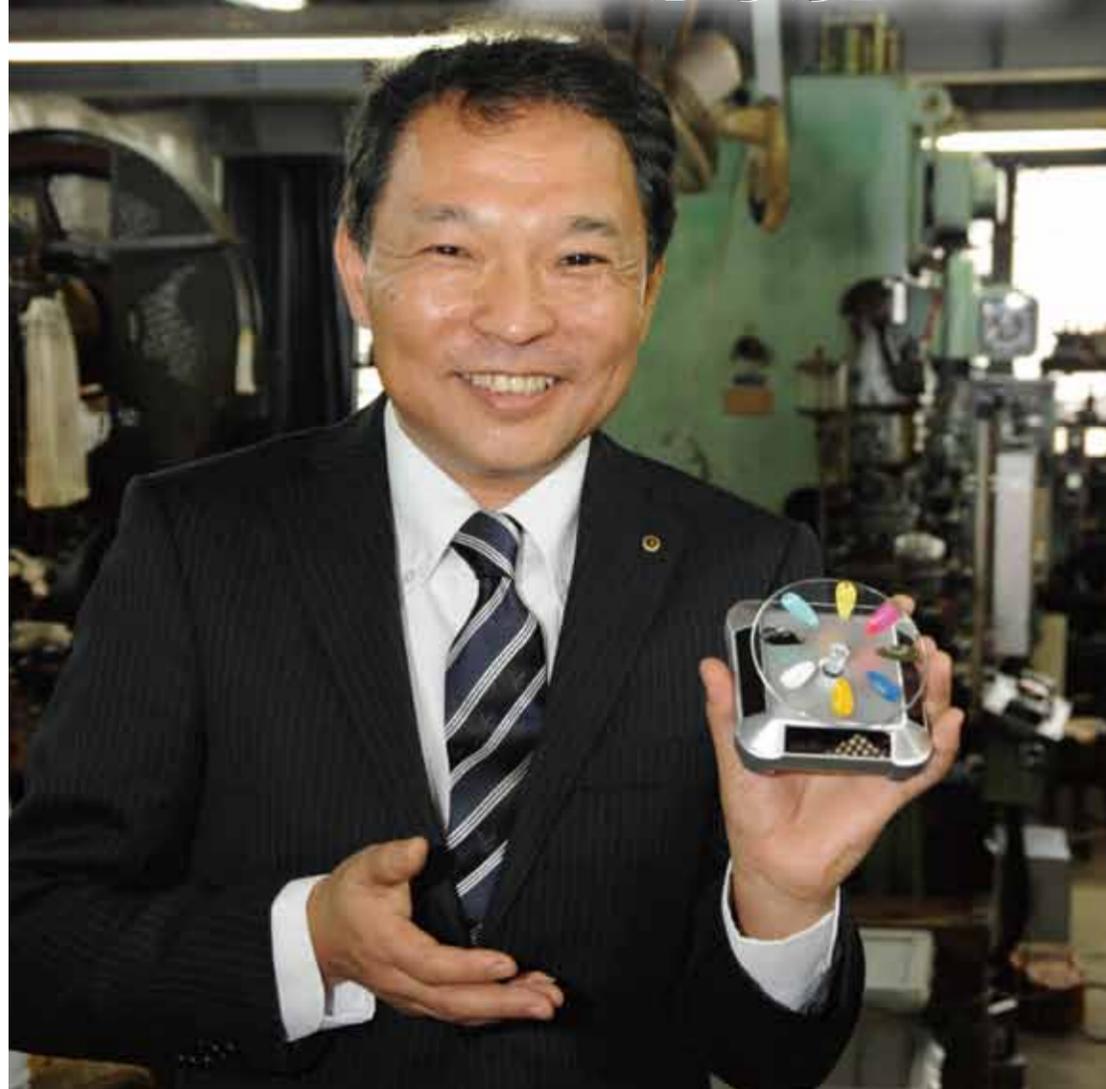


幾度の危機を乗り越え、 金属加工一筋56年



1年がかりで開発したスプーンを手にする下川社長。創業者支援にも意欲を燃やす



私のこだわりものづくり

有限会社下川製作所

しも かわ たかし

下川 隆 代表取締役社長

昭和35年西東京市生まれ
平成13年に社長就任
西東京商工会工業部会長

◆住所: 西東京市北原町1-29-9
(工場) 所沢市荒幡255
◆電話: 04-2923-2773

下川製作所 西東京商工会 検索



①熟練の技を駆使し、板バネのプレス加工を行う
②新製品のスプーンはニジマス釣りに最適



培った技術でルアーを製作し、
市内の創業者も支援

有限会社下川製作所(下川隆社長)は長年培った技術力で、ハイブリッド車の部品やパソコンのプリンター部品、各種板バネなどを製造している。その高度な金属加工技術は、数多くの取引先から高い評価を得ている。

創業は昭和35年。下川社長の父、下川道雄氏が西東京市(当時は田無市)北原町の自宅敷地内に工場を建て、ブラウン管の取付金具や釣り具のリール部品などの製造を始めた。当時は高度経済成長期。日本中が好景気に沸いていた頃で、受注が絶えることはなかった。工場を拡張するため、昭和43年、所沢市荒幡に新工場を建設。業績は順調に伸びていった。

下川社長が大学を卒業して入社した昭和58年頃は、レジスターのミニプリンターの部品製作の仕事が殺到し、月5万台も出荷していたという。ところがバブル崩壊後、大手企業の海外シフトに伴い、その仕事は中国・深圳などに流出していった。

「月600〜700万円あった売上が2〜3万円まで落ち込みました。先代の社長は廃業も視野に入れ、私に転職を勧めました」と、下川社長は当時を振り返る。その時、経営革新を相談した商工会からコピー機の部品加工の仕事を紹介してもらい、廃業は免れたという。

その後、長引く不況の中で堅調に歩んできた同社だが、またもや大きな危機に襲われる。平成20年に起こったリーマンショックだ。社長に就任して8年目。会社経営に自信をつけてきた頃に、危機は突然やってきた。

「パタッと仕事がなくなると、今度は大変かもしれないと考え始めたその時、以前の取引企業にいた方から、折り畳み型携帯電話のヒンジ(蝶つがい部分)の部品製作を大量に依

頼されました。日曜も休みなしで、毎日何千個と作り続け、何とか立ち直ることができました」

精度、納期、コストなど顧客ニーズに最大限応えることを企業理念に、同社はコツコツと企業努力を続ける。現在は東京消防庁から火災報知機検査機具の部品製作受注が毎月あるほか、東京ガスからはユニットバスのすき間に設置する建築金具の依頼も。このほか、電力関係の金具製作などもあり、フル稼働状態が続いている。

「ちょっと無理かなと思われれるような急ぎの仕事にも、最大限の努力で対応しています。お客さまから『おかげで助かったよ』と喜んでいただけると、苦勞も吹き飛びます」と笑顔で語る下川社長。そうした姿勢が取引先との信頼関係を強固にしている。

平成26年から、オリジナル製品作りにも取り組んでいる。釣り具用品の販売で創業を目指す人から依頼され、ルアー釣り用のスプーン(さじに似た形の疑似餌)を製作した。この「MKRSプーントウレル・サイト0・98」は厚さ0・5mm。5つの金型を使い、真鍮で作っている。何度も金型を作り直すなど試作を重ね、1年かけて完成させた。平成27年4月に1000個を納品。管理釣り場で販売され、「ニジマスがよく釣れる」と評判は上々だ。

「弊社の技術が創業者の役に立てるのはとても光栄なこと。今後も、創業を目指す方たちの支援をしていきたい」と話す下川社長。

「西東京市内には高い技術を持つ会社がたくさんあるので、横のつながりをつくり、共存共栄の道も探っていければ」と西東京商工会工業部会長として、市内企業の連携も模索している。